

## 古代文字の世界(1)

中村雅之

### 1. 古代文字の定義

古代文字とは何か。一般には漠然と「古い時代の文字」と捉えられがちである。しかし「古代」という語は極めて曖昧で、歴史学において、文学において、言語学において、あるいは他の分野においても、「古代」にはそれぞれ独自の定義が与えられる。文字の場合には、他の領域とは異なり、古代と現代の間に「中世」や「近代」という段階が設けられることは通常ない。そこでまずは「古代文字」の最も単純な定義として、「現在通行している文字を除く全ての文字」としておく。時代的には新しいものであっても、現代の文字と異なるものは全て古代文字ということになる。また、現在通行しているものと同じ字種であっても、対象となる言語が異なったり、書体や正書法が異なる場合には古代文字と見なされる場合がある。古代文字は広大な範囲にわたることになるが、便宜上、次の 3 類に分けることができる。

- ① 過去のある時点で使用が途絶えた文字、いわゆる「失われた文字」。解読作業を必要とする。例) ヒエログリフ、各種の楔形文字、マヤ文字、西夏文字など。
- ② 現在通行する文字の祖先あるいは同系統の文字。一定の解読を必要とすることが多い。例) 甲骨文字、ブラーフミー文字、ソグド文字、パспа文字など。
- ③ 現在通行している文字の古い書体や古い正書法。訓練を積まなければ読めないものから、さほど労せず読めるものまで多様である。日本語を例に取れば、江戸時代以前の各種古文書から戦前の旧字体・旧仮名遣いの資料までを含む。

最後の③については、これを古代文字と呼ぶことにためらいを覚えるかも知れないが、ここでの定義は時代区分とは切り離されたもので、現代人が習慣的に読み書きする文字体系と些かなりとも異質なものを古代文字という枠に収めたものである。したがって、同じ文字であっても現代の習慣に収まらない場合には古代文字の資料と見なすことになる。

換言すれば、何かしらの解読を求められるのが古代文字なのだと言ってもよい。③の資料の中には解読という大げさな作業を必要とせず、積読あるいは読解というレベルのものもあろうが、それらの作業をも広く「解読」と捉えるならば、古代文字とは「解読を必要とする文字」ということになる。

つまり、上に「現在通行している文字を除く全ての文字」とした古代文字の定義は、むしろ「種々のレベルでの解読作業を必要とする文字」とする方が核心を衝いていることになる。

### 2. 古代文字はなぜ読めないのか

以上のように、ここでは古代文字の「古代」を単なる時代区分としてではなく、何かしらの解読を必要とするか否かという文字の区分基準の一つとして用いる。簡単に言えば、すぐに読めない文字(個々の文字や文字組織全体、あるいはその資料)を古代文字と捉える訳である。

では、古代文字はなぜ読めないのでしょうか。二つの観点からの説明が可能である。第一に、文字は文化的な習慣の賜物であるから、その習慣を支える文化自体が減んでしまえば、文字も使用されなくなり、読めなくなる。①として分類した「失われた文字」や②の多くの文字がこれに相当する。

第二に、文字はそもそも読みやすさを意識して作られてはいない。多くの文字組織において、一つの語に複数の表記があったり、一つの文字に多くの読みが可能なのは珍しくない。我々の日本語表記はその典型である。「認める」が「みとめる」なのか「したためる」なのかは、文脈に依存する。あるいは「はかる」という語を漢字で表記する場合、「図る」「測る」「計る」「諮る」「謀る」などいくつかの表記が可能で、どれを使うか迷うほどである。このような複雑さは日本語だけのものではない。アッカド語楔形文字も日本語と同等かそれ以上の複雑さを備えていたことが分かっている。

文字が意思伝達のために、表記しやすく読みやすい体系であるはずだというのは空しい願望に過ぎない。まず出発点として、多くの文字は異なる言語からの借用および変形である。日本語の漢字は中国語からの借用であり、アッカドの楔形文字はシュメール語からの借用であり、ラテン文字(ローマ字)はギリシア文字からの間接的な借用であり、そのギリシア文字はセム文字からの借用である。つまり、多くの文字はその言語を表すために作られたものではない。出発点において、すでに表記の困難さを内包しているのである。徐々に、言語に合わせて表記を改良してゆくことになるが、伝統表記と革新的な表記の間で試行錯誤が繰り返される。英語の表記と発音の関係を見ただけでも、読みやすい表記を作ることの困難さは理解できよう。

さらに、文字表記には種々の目的のために独特の書体が発達したり、荘厳さを保つために読みやすさが犠牲になることがある。漢字の篆書体は印章などに用いられるが、周辺のパスパ文字・満洲文字などもその習慣を踏襲した。あるいは中国の伝統的な漢字資料やパスパ文字碑文などでは意味の区切りを示す句読点が用いられない。古代オリエントの多くの文字も同様である。

上に、文字は文化的な習慣の賜物と述べたが、それが端的に表れるのが筆記用具と書体である。日本で毛筆と墨が主たる筆記用具であった時代には、草書体や崩し字が日常のものであったが、鉛筆やペンの時代になるとほぼ楷書体に統一される。崩し字の読めない現代人には、明治の人が書いた手紙の文字はすでに古代文字である。

文字は、互いに表記の習慣を共有しているもの同士のものである。その習慣を持っていない者のことは考慮されていない。古代文字とは、すでに廃れてしまった習慣に則った表記である。我々が古代文字を読むためには、その文字表記の習慣を獲得する必要がある。

### 3. 失われた文字

失われた文字は「古代文字」という言葉で我々が連想する第一のものであろう。実際、古代文字の名を冠した多くの概説書も失われた文字を対象としている。例えば、モーリス・ポープ著、唐須教光訳『古代文字解説の物語』(新潮社、1982. のちに図版を大幅に削除して『古代文字

の世界』と改題、講談社学術文庫、1995)で扱っているのは、この種の文字である。

失われた文字の中でも花形と言えるのが、古代エジプト文字と楔形文字である。この2種(より正確には2群)の文字への挑戦が、それぞれエジプト学、アッシリア学という歴史・文学・文化を含む新たな領域を生んだ。異なる3種の文字の対訳資料ロゼッタストーンを利用してフランス人シャンポリオン(Jean-François Champollion、1790-1832)がヒエログリフ(=聖刻文字)を解読した物語は、多くの概説書に繰り返し述べられており、古代文字解読の楽しみを我々に教えてくれる。英国人ローリンソン(Henry Creswicke Rawlinson、1810-1895)によって花開いた古代ペルシア語楔形文字、さらにはアッカド語楔形文字の解読も同様である。

ただし、解読は一人の人間によってすべてがなされることは稀で、著名な解読者の前にはそれを可能にした準備段階があるのが普通である。シャンポリオンの前にはフランス人サシ(Silvestre de Sacy、1758-1838)と英国人ヤング(Thomas Young、1773-1829)が予備的な仕事をした。サシはヒエログリフに見られるカルトゥーシュ(=いくつかの文字群を囲む楕円の枠。今では王家の名を示すために用いることが分かっている)を表意文字であるヒエログリフを表音的に読むことを示す記号と考えた。この解釈は厳密には正しいとは言えないが、この美しき誤解によって解読への糸口が与えられることになる。その最初の成果はヤングによって公表された。カルトゥーシュの中に記された複数の人名を比較して、いくつかの文字の音価が決定されたのである。その正答率は高くなかったが、解読の方法論が示されたことが重要である。解読の門にヤングが差し込んだ鍵を、該博な知識とひらめきでシャンポリオンが正しい方向に回し、大きく開いてみせたのである。

同様にローリンソンの前にはドイツ人グローテフェント(Georg Friedrich Grotefend、1775-1853)がおり、さらにデンマーク人ラスク(Rasmus Christian Rask、1787-1832)やドイツ人ラッセン(Christian Lassen、1800-1876)がいた。あるいは前史としてサシによるササン朝ペルシアの碑文研究も加えるべきかも知れない。ポーペ前掲書(1995:182頁)のまとめによれば、古代ペルシア語楔形文字の解読には3つの段階がある。第1段階はペルシアの王たちの固有名詞と称号のグローテフェントによる識別と音価の割り当て(正答率は3分の1)。第2段階は比較言語学に照らした正しい音価の決定(ラスクやラッセンの貢献)。そして第3段階が入手しうるテキストが何倍にも増え、すべての資料が満足のいく翻訳で公刊される段階。この第3段階のほとんどがローリンソンの仕事である。したがって古代ペルシア語に関しては、ローリンソンは解読者というよりは、資料提供者であり翻訳者に過ぎないとも言える。しかし、これを足掛かりとして、アッカド語楔形文字の膨大な資料群に取り組み、アッシリア学という新たな世界を切り開くことになるのである。

中央アジア以東では、11~14世紀に用いられた西夏文字の発掘と解読が最も華やかなものである。しかし、西夏文字においてはヒエログリフにおけるような胸躍る解読史はない。19世紀までは資料が限られていたこともあって、解読はほとんど進まなかったが、20世紀初頭にロシアのコズロフ探検隊が黒水城(ハラホト)で多くの資料を発掘して以降、様相は一変した。漢字との対音対訳資料や、多くの仏典、西夏人自身による辞書も多数発見されたのである。それ

らによって研究は飛躍的に進み、今では李範文編著『夏漢字典』(中国社会科学出版社、1997)を利用すれば、素人でもある程度の西夏文が読める状況にある。

一方、当然のことながら、失われた文字が全て解読されている訳ではない。千年以上にわたって用いられながら 16 世紀のスペイン人の侵略とともに滅んだ中央アメリカのマヤ文字は、20 世紀になってかなり解読が進んだが、未だ完全解明には至っていない。10 世紀の中国北方に興った契丹人の遼朝では、2 種類の契丹文字(契丹大字と契丹小字)が作られたが、契丹小字の一部分(ほとんどは漢語借用語彙)が解読された以外、解明が待たれている状態である。

(つづく)